

氏 名 野 上 建 紀

本 籍 福岡県

学 位 の 種 類 博士 (文学)

学 位 記 番 号 社博甲第 46 号

学 位 授 与 の 日 付 平成 14 年 3 月 22 日

学 位 授 与 の 要 件 課程博士 (学位規則第 4 条第 1 項)

学 位 授 与 の 題 目 近世肥前窯業生産機構論

—現代地場産業の基盤形成に関する研究—

(Mechanism of the Production of the Early Modern Hizen Porcelain

—A Study on the Formation of the Foundation of Modern Local Industry—)

論 文 審 査 委 員 委員長 佐々木 達 夫

委 員 梶 川 勇 作, 高 濱 秀

学位論文要旨

本論は近世肥前の窯業圏の形成過程を考察し、その生産機構を明らかにすることを目的とする。現代地場産業の一つである肥前窯業の産業基盤は近世における発展過程の中で形成されたものであり、その基盤形成を考える上で重要なテーマとなりうると考えたからである。

近世肥前窯業は、16世紀末の大陸からの技術導入によって成立する。その最初期段階に位置づけられる佐賀県岸岳周辺の窯場は、窯の数も少なく、またその規模も小さい。窯場は燃料が豊富な山間部に窯場の環境が求められている。窯場そのものの立地条件が最も優先されている。

一方、16世紀末～17世紀初に成立する有田の西部地区及びその周辺地区の窯場は、平野に面した丘陵地に位置している。窯業の急速な発展によって増大した人口を支えるだけの環境を山間部には求められなくなったためであり、潜在的な労働力を有する農業地と結びつく必要があったためであろう。そして、これらの窯場は、佐賀藩・大村藩・平戸藩の三藩の境界域に位置しており(図1)、それぞれの藩の陶工は交流しながら生産技術や情報を共有していた。この三藩の境界域に成立した窯業圏の中核となったのが、生産能力、生産技術ともに先進的地位を占めていた有田の西部地区であった。この三藩境界域窯業圏は、有田の西部地区の磁器生産技術などの先進的な技術や情報を媒体としており、藩境を越えた生産と流通のネットワークで結ばれた窯業圏であった。

そして、この三藩境界域窯業圏は、豊富で良質な磁器原料産地の発見、佐賀藩による寛永14年(1637)の窯場の整理統合による有田西部地区の窯場の廃止によって消失する。有田における泉山磁石場、波佐見における三股陶石、平戸藩における網代石の発見は、技術や情報を媒介とした三藩境界域窯業圏から、地域の原料に立脚する地域的窯業圏へと変化させることになった。有田では磁器原料産地である泉山磁石場に近い東部地区に窯場が築かれ、波佐見でも同様に三股陶石の産地に近い東部地区に窯場が築かれるようになる(図1)。さらに佐賀藩の窯場の整理統合によって有田西部地区の窯場が廃止され、三藩境界域窯業圏はその中核を失うことになる。そして、佐賀藩は有田東部地区を中心とした窯業圏を形成させ、無制限に拡大する窯業圏を抑制する。それは窯業圏の単なる空間的な管理にとどまらず、泉山陶石の一元的かつ排他的な供給を基礎におく管理体制を伴った窯業圏へと変化させることになったのである。他藩に対しては排他的な窯業圏の形成であり、そのことがそれぞれの藩による地域的窯業圏の形成を促進した。よって、三藩が交流を図りながら形成されていった窯業

圏から、それぞれの藩の中で生産ネットワークが完結する地域的窯業圏へと変化した。各藩の経済的自立化につながるものであり、現在の有田焼、波佐見焼、三川内焼の始まりとあってよい。

また、肥前の窯業に最も大きな影響を与えた外的要因の一つが17世紀中頃～後半の東アジアの情勢である。17世紀中頃の中国国内の混乱と17世紀後半の海禁政策は、単なる量的な需要の増大のみでなく、質的にも多様性のある需要をもたらした。肥前磁器の海外輸出を本格化させた。その結果、肥前の窯業圏はその範囲を大きく拡大し、生産能力を拡大させるとともに、窯業圏全体における地域的分業化や窯業圏内における技術的分業化が大きく進むことになった。有田では東部地区（内山地区）から西部地区（外山地区）に窯業圏が拡大する一方で、東部地区内においては海外輸出の本格化に伴う需要の多様化に対応しながら、かつ競合せずに効率的な生産を行うために窯場の再編成が行われた。1650年代頃の技術革新によって、新しい生産技術が一般化する過程において、技術水準の低い陶工集団を淘汰する一方で、東部地区全体で効率的に機能するように窯場が配置される。ここでは泉山磁石場に近いという各々の窯場の地理的条件よりも東部地区の窯業圏全体の中での機能的配置が優先されるようになる。赤絵町の成立がその最大の産物と言える。赤絵町の成立は単なる生産工程上の技術的分業化にとどまらず、東部地区の性格づけを意味しており、江戸時代を通して肥前の窯業圏の中心となる内山地区が実質的に形成されたといつてよいであろう。

一方、有田の西部地区など後の外山地区では1640年代頃からの国内磁器需要の増加に対応して、新たな窯場が興っていたが、これらの窯場に東部地区から移ってきた陶工も加わる。内山地区に比べて質よりも量が重視される製品の生産を主体に行うことになるが、外山地区にあつて特殊な位置づけにあるのが、南川原（特に柿右衛門窯）や後に藩窯となる大川内山である。これらの窯場では内山地区よりもむしろ水準の高い製品を生産する。比較的良質で均一な製品を大量に生産する場合には、内山地区の生産システムが有効と思われるが、より良質な製品を生産する場合には、地区全体で生産工程が完結するシステムよりも窯場で生産工程が完結するシステムの方が都合がよいのであろう。

そして、波佐見では海外輸出の本格化をより直接的な契機として、窯業圏が拡大する。17世紀前半の波佐見の主力製品は青磁製品であり、染付製品主体の有田とは製品の種類によって棲み分けていたが、17世紀後半以降、波佐見においても染付製品の本格的な量産を行うようになり、品質による地域的分業につながった。波佐見では有田の外山よりもさらに生産する製品の種類を絞り、それを量産するようになる。

よつて、内山地区では相対的に良質で多様な製品を生産し、外山地区では南川原や大川内などの一部の窯場を除いて、内山地区に比べて質よりも量が重視される相対的に質の劣る製品を主体に生産し、そして、波佐見地区では外山地区で生産された製品の種類をさらに絞り込んで量産するという地域的分業が成立することになる。そして、この品質による地域的分業は、後の内山・外山・大外山の産地区分へとつながるのである（図2）。内山・外山・大外山の区分は、基本的には泉山陶石の使用状況によるものである。上質の泉山陶石を使用する有田東部地区である内山、それよりも劣る泉山陶石を使用する外山、そして、基本的に泉山陶石を使用しない大外山である。佐賀藩の窯業に対する管理は、波佐見など他藩の窯業圏に対して直接及ぶものではないが、泉山陶石を商品化せず、他藩に流出させないことで、他の大外山に対する管理と同様の状態を作り出したのである。すなわち、生産システムはそれぞれの地域的窯業圏によって異なるものの、泉山陶石の管理を基礎に置くことで、肥前全体としては有田内山を中心とする同心円状の窯業圏を形づくる生産機構がこの時期に構築される。

しかし、1684年には清朝が海禁政策を解き、海外需要は減退する。中には窯場そのものが廃止されるものもあるが、17世紀後半に飛躍的に拡大した生産能力を国内の新しい需要層に振り向けることになる。とりわけ、海外輸出の本格化を直接的な契機として窯業圏を拡大させた波佐見では、生産コストを削減し、量産化することで国内の磁器需要を拡大させていった。17世紀後半の窯業圏の拡大と地域的分業化が産業の発展過程に応じたものであったのに対して、17世紀末以降の国内市場における新たな需要層の開拓は、むしろ確立された窯業圏でどのように対応するかという対応の問題で

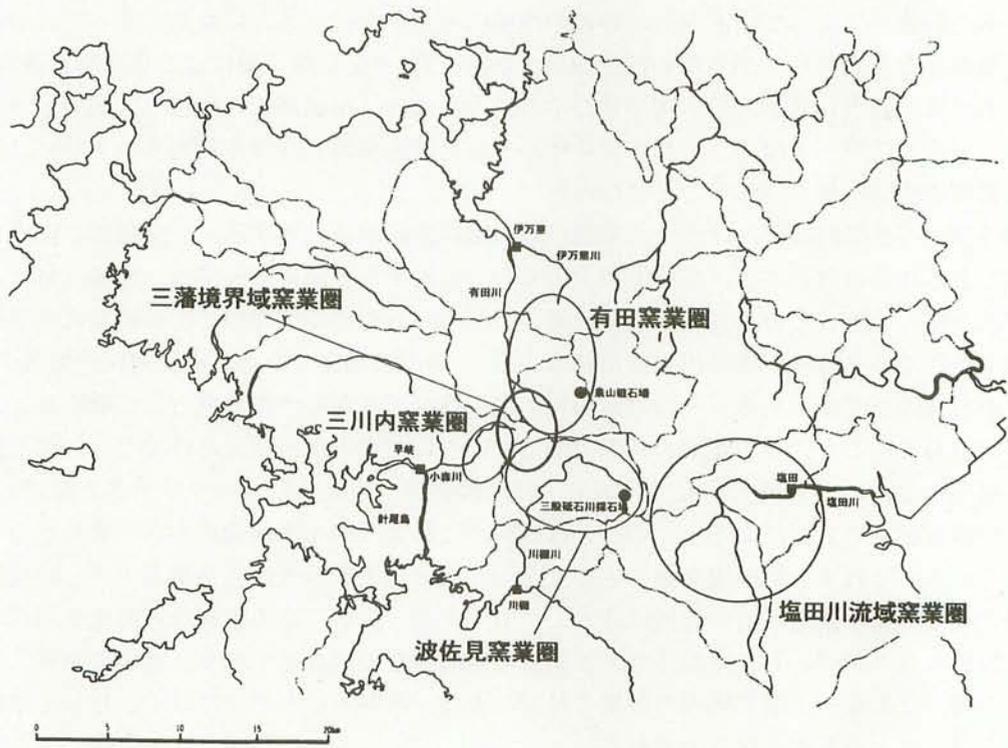


图1 肥前窯業圏位置图

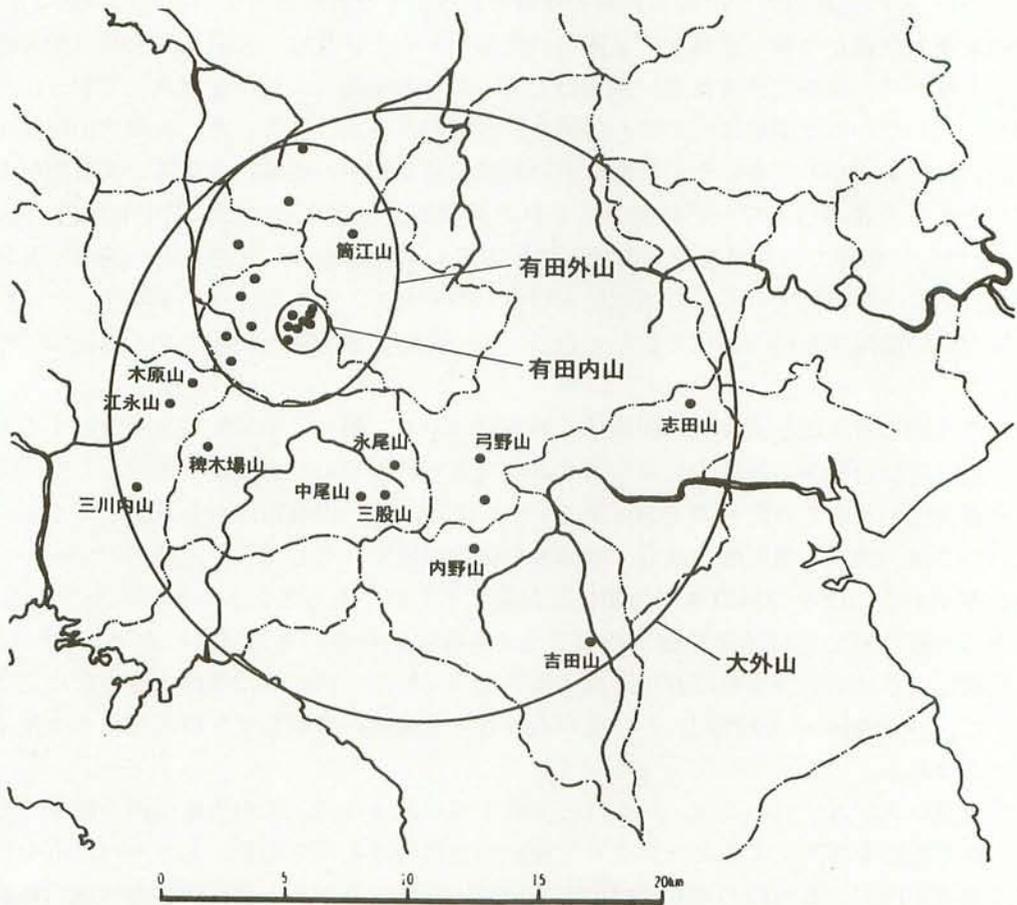


图2 有田内山·外山·大外山区分图

あった。その対応の方法として有効であったのが、製品の大量焼成と画一的生産であった。この大量焼成と画一的生産によって、国内向け製品の本格的量産化を行うことになる。そして、この生産地における量産化を支えたものが当時の流通機構である。18世紀以降、藩による専売制が導入されるが、その一方で筑前商人ら旅商人の活躍が盛行する。とりわけ、筑前商人の商圏は全国の地方市場に及んでおり、当時の江戸・大坂の二大都市間を中心とした流通機構と異なる流通ネットワークで、肥前磁器の販売網を全国に張り巡らすことになった。

18世紀末～19世紀初にかけては、肥前以外の磁器生産地が急増する。肥前磁器が国内の磁器市場を独占できる状態は終わるが、磁器需要そのものが拡大する状況にあつては、市場における肥前磁器の相対的地位の低下がそのまま生産規模の縮小につながるものではない。この時期に生産規模を飛躍的に拡大させている窯場が塩田川流域窯業圏(図1)の志田地区である。志田地区の発展の背景には、いくつか合理的な理由がある。一つは塩田川の塩田港が天草陶石の集散地として機能し、豊富な原料の入手が容易であるという生産地の利点である。一つは在地の塩田商人だけでなく、伊万里商人が生産に直接関与し、伊万里商人がもつ全国の市場に陶磁器を販売するネットワークと直結したことで、大きく販路を拡げたことによる。このことは同時にこれまでの生産機構が大きく変わりつつあることを示している。それまで肥前窯業圏の中心であった有田窯業圏や波佐見窯業圏では、磁器原料の陸運を前提として、原料産地に近い地域に成立したものであったが、志田地区などの塩田川流域窯業圏では、原料の水運を前提として原料産地と直結した窯業圏を形成させており、地域の原料に立脚する地域的窯業圏とは異なる。窯業圏内の窯場の結びつきは、原料そのものではなく、むしろ原料を商品として扱う商人によるものとなるのである。

有田でいう内山、外山、大外山の区分は、泉山陶石の一元的かつ段階的な供給による生産機構上の区分であるが、それは泉山陶石が最も良質で豊富であることを前提としていたものであった。しかし、泉山陶石よりも良質かつ量も豊富な天草陶石の商品化とその普及は、その前提を根本から覆すこととなった。とりわけ、原料に恵まれない地域ほど早くから天草陶石の使用を導入しており、それまで陶器生産しか行わなかった窯場においても磁器生産が行われるようになった。有田内山地区を中心とする同心円状の窯業圏から、有田や波佐見など原料産地に立脚する地域的窯業圏と天草陶石の産地を一つの起点とする生産ネットワークに組み込まれた窯業圏が並存する状況に変化したのである。18世紀末～19世紀にかけての九州及び周辺地区の地方窯の増加現象は、既存の生産機構が変容し、新たな生産ネットワークが拡大していく過程におけるものである。そして、その生産ネットワークの拡大とともに肥前の磁器生産技術が広く伝わったことが、全国に地方窯を出現させる要因の一つとなるのである。

以上のことから近世肥前窯業の生産機構の特質について、第一に磁器原料を基盤とするものであったこと、第二は技術的かつ地域的分業システムに支えられたものであったこと、そして、第三は流通機構と密接な関わりをもったものであったことがいえる。第一の磁器原料を基礎とするものであったことについては、地域的窯業圏の成立、地域的分業化の確立、そして、生産機構の変容がいずれも磁器原料の存在あるいはその供給体制の変化に起因するものであることから明らかである。17世紀前半に有田や波佐見で地域的窯業圏が成立したのも磁器原料そのものが求心力であったし、17世紀後半の品質による地域的分業化は有田が泉山陶石を一元的かつ排他的に供給することによって行われた。そして、18世紀末～19世紀にかけてみられる生産機構の変容もまた磁器原料の供給体制の変化であったのである。

第二の分業システムについては、一つには生産工程における各工程や生産技術の技術的分業化であり、各工程や技術を専門化することにより生産効率を高めるものである。もう一つは窯や窯場あるいは地域的窯業圏における製品の作り分けによる地域的分業化であり、窯や窯場や地域的窯業圏がそれぞれ役割を分担するものである。肥前窯業圏の生産システムはこれら二つの分業化を効率的かつ継続的な生産に結びつけるための仕組みであった。

第三の流通機構については、肥前窯業が対象とする市場が生産地と近接した地域ではなく、むしろ遠隔地に存在するものであることから必然的に流通機構は生産機構と密接な関わりをもつことになる。海外貿易においてもその担い手の動向が大きな影響を与え、17世紀末以降の国内向け製品の本格的量産を支えたものは、その製品を売り捌く流通機構であった。そして、19世紀初～中頃の志田地区の生産地の急成長の要因の一つもまた流通機構であった。

Abstract

The history of ceramic industry in Hizen began at the end of the 16th century. The ceramic industrial area as a center was formed at the west Arita near the territorial borders of the Saga clan, Omura clan and Hirado clan until the early 17th century. The gravitated force of the area was obtained by mainly technical skill and information developed at the west Arita. Artisans who lived at this area had the common technical skill and information over the territorial borders of the clans.

In the 1630's each feudal clan formed a ceramic industrial area, where was provided by the locally produced ceramic material (kaolin). As a result, the industrial area near the borders disappeared.

In the middle of the 17th century Hizen porcelain began to be exported abroad instead of Chinese porcelain. A lot of porcelain for export was produced in Hizen. The demand of Hizen porcelain rapidly increased. A large number of new kilns sprung up in Hizen, and the industrial area expanded. On the other hand, each regional area was differentiated in various demands.

At the end of the 17th century Chinese porcelain began to be exported abroad by ship again. Hizen porcelain had to seek a new market in the domestic market. The industry of Hizen porcelain therefore chose the method of mass and uniform production to respond the demands, and the network for the circulation helped to establish a new local market.

Many porcelain kilns have sprung up all over the country since the end of the 18th century. The monopoly of Hizen porcelain in the domestic market ended. Under the circumstances Shida area in Hizen grew up as a porcelain-producing area. There are two reasons for the growth; one is that the Amakusa kaolin was widely accepted. Shida is located in the Shiota river basin; therefore, transportation by river directly linked Shida area to Amakusa area. Another is the cooperation of the Imari merchants. The Imari merchants had a network for the circulation to sell the products all over the country. This growth of Shida area signified the change of organized production, because until then the ceramic industrial area in Hizen depended on the local material by land transportation.

論文審査結果の要旨

佐賀県有田は江戸時代初期から現代に至る日本を代表する焼き物産業の町である。多くの地場産業が近代以降に衰退したが、この地域は現在も繁栄している。その産業基盤は江戸時代に築かれ、現在もその上で生きていると考え、産業基盤の形成過程を考古学資料から検討することが論文の目的である。

考古学による窯業史研究は製品の生産技術に関するものが中心であり、生産背景に関する研究は資料が制約されるためきわめて少ない。そうした現状を乗り越えるため、これまでと同様の考古学資料を用いながらも、窯業圏の内部構成と空間的広がりの変遷を追うことにより、窯業圏の形成過程と生産メカニズムの特質を叙述することに成功したことは評価できる研究成果である。

研究方法は、古窯跡出土資料から地域性を抽出し、それぞれの地域を比較して相互関係を検討するというものである。窯業圏の外部との関係については各地の都市遺跡や沈没船の出土資料、他産地の製品と比較している。文献史料も考古学資料によって検証しながら用いている。

研究資料の中心は、有田の古窯跡 50 基と生産遺跡約 30 ケ所、数万点の出土資料であり、これに海岸や沈没船から採集した資料、及び近年急増した日本近世都市遺跡の出土資料を加えている。国内と海外の遺跡計 355 ケ所を整理分析しており、資料編に現在知られる肥前陶磁に関する発掘調査事例も網羅し、本文編の基礎資料としている。

本文では、資料編の資料に基づき、第 1 章で肥前窯業の構成要素ごとに形態と変遷を述べ、その画期をとらえている。第 2・3・4 章は肥前の窯業圏の形成過程を 17 世紀前半、17 世紀後半、17 世紀末以降の三段階に区切り、第 1 章で述べた要素を組み合わせて窯業圏の形成過程を論じている。第 5 章では肥前窯業圏の形成過程に基づいて生産機構の特質を論じている。

肥前の陶磁産業を構成する要素として、生産施設、製品、陶工、商人などを取り上げその変遷と画期を示し、生産施設の構造・空間的配置・分布状況の変遷、古窯跡出土資料と都市遺跡出土資料の比較による製品群の変遷、過去帳の記載と古窯跡の出土状況を比較した陶工集団の移動、古窯跡出土資料と沈没船資料の比較による流通形態、等という問題を検討している。肥前の地域的窯業圏の成立を述べる部分では、陶器生産から磁器生産への変化をたんに産地内の技術的な流れと捉えず、各藩の経済的自立化の中に位置づけ、肥前窯業圏の中核を守り続けた有田と波佐見の窯場の成立過程を追跡し、出土資料比較によって生産システムを共有する地域的窯業圏の形成を浮かび上がらせている。その後、海外輸出が窯業圏の形成や生産機構の確立に影響を与え、有田と波佐見が性格の異なる窯場に変化することを指摘し、大量輸出時代を迎えた肥前の窯業圏の拡大や圏内における地域的分業化を論じている。製品の違いによる生産窯の分布と都市遺跡の出土品を比較し、文献史料にみられる陶工集団の移動も論じる。

様々な面からの検討作業によって 17 世紀中頃の肥前窯業圏の窯場再編成と技術革新を海外輸出の本格化に伴う連鎖的事象と捉え、海外貿易による需要の増大と多様化が肥前窯業圏の地域的分業化を進め、19 世紀まで継続された生産機構を生み出したと論じる。有田と隣接する波佐見窯業圏の様相から 17 世紀末以後は肥前窯業圏が国内市場に向けた大量焼成と画一的生産を行ったことを指摘し、沈没船資料からそれを支えた流通機構を論じる。18 世紀末以降は地方窯との競合で有田や波佐見は低迷期を迎えたが、これは同時期に急速に成長した周辺の様相から肥前窯業圏内の内部変化に要因があると指摘する。それまでの地域的窯業圏と異なる成立要因をもつ窯場の出現が既存の生産機構を変容させ、その変容が全国各地に磁器生産地を広げると指摘する。

本論は筆者の既発表の肥前陶磁器に関する論文 15 編、水中考古学に関する論文 8 編、学会口頭発表 5 編を組み合わせて構成されている。扱った資料数は莫大で資料収集能力は優れており、考古学資料の整理分析方法も高い水準にある。考古学資料の事実関係記述については精度が高く詳細である。考古学資料を用いた記述ではさらに絞り込んだ表現が望まれる部分も一部に見られ、引用論文やこれ

までの学界における成果に対する自らの価値判断の記述が少ない面も見られる。磁器原料産地の変化や供給体制の変化で生産地が規制され生産基盤が形成された、社会的分業体制が窯業の発展過程の中で作られ産地の基盤となった、流通機構が生産機構に与えた影響を具体的に指摘した、などの点を考古学資料から論じたことは、考古学資料を歴史的に解釈した精力的な研究といえる。磁器原料の管理と流通の変化が生産機構の変化に影響したとする考えは、これまでの考古学資料を包括的に扱い、個別資料を結びつけるものが何かを探求した結果として生まれたものと評価できる。窯業生産機構を総合的に多種類の考古学資料を用いて復元記述した幅広い成果には見るべき新論点が多く、博士論文の水準に達しており、審査委員は一致して合格と判定した。